【中学校　詩　最優秀賞】

一つの水筒

浦添市立仲西中学校　二年
新里　正哉

僕が見つけた
一つの水筒
僕が触れた
一つの水筒
その水筒を見て触れて
甦る　六十五年前

ダダダダダ
ドッカンー
住民が叫び逃げまどう中
耳をつんざくような
銃音
壕の中
日々息を殺し
生きた心地もしない毎日
「子供が泣いたら殺される」
口の中にタオルをつめて
小さい命をつぶす
その現状を
今までの生活で
少しも
想像しなかった
当然
僕はその時代を見てもない
生きてもない
けれど分かる
その残酷さ
その悲惨さ
その無惨さ

真っ黒にこげても
いくら傷がついても
こわれない水筒
中身は一滴の水
水筒の持ち主は
どんな思いで
水筒を持っていただろう
中身にたくされた
伝えたい思い
それを自分が受け取りたい

赤い炎で包まれる家
さも楽しそうにガムをかみ
笑い合う米兵
煙をかぶる住民
飛び散る血
白旗の少女
いろいろな事が頭をよぎる
あれから六十五年
平和な世になった
なったはずだった
しかし
「自殺」
「イジメ」
「犯罪」
ニュースが報じる現実
その人たちに
知ってほしい
過去を
戦争ほど　最悪な事はない
あの現状では誰もが
生き残りたい

家族に会いたい
また太陽の下で笑い合い
遊びたいと思った
生きたくとも
生きられない
現実があった

だから
知ってほしい
そして
あの思いを受け取り
心でよく考えてほしいと思う
一つの水筒と共に

今から　十年後　二十年後
ぼくたちは太陽の下
笑い合っているだろうか
それとも
同じあやまちを
また繰り返しているのか
まだ　分からない
でも　今からでも
一人の心が変われば
皆が変わる
皆が変われば
地球も変わる
だから
今から皆で考えよう
一つの水筒の中にある
皆の魂とともに